

まじふ

Vol. 15 No. 4

2019. 2. 3

「これこそ信仰の力」 主任牧師 中島 聡

「すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。」
コリント四・一五

新しい年を迎えて、「門松は冥土の旅の一里塚……」ではありませんが、「ああ、また一つ年をとって老いていくのか……」と捉える人がいます。その通りかもしれません。しかし、「主の恵み」を信じる信仰者はひと味違います。新年の標語聖句はこう続きます。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」これぞ究極のアンチエイジングと言えるでしょう。ただし、この場合のエイジングとは、見た目年齢や、身体機能のことではありません。聖書も「外なる人」Ⅱ「肉体」は衰えていくと言っています。しかし、不思議なもので教会に通っている人は大体が

若く見えます。これは本当のことです。礼拝には、お祈りや聖書の言葉によって心に平安が与えられる、讃美歌を歌って気持ちが昂揚するなど、精神的肉体的に良いことが沢山あり「外なる人」にも良い影響があるからです。しかし何と言っても素晴らしなのは、「内なる人」が新しくされることにあります。

この「内なる人」とは、スピリチュアル、心の有り様、深い精神性、霊的な要素のことです。私たちは食事、バランスの取れた栄養が体を作ることを知っていますが、人生の経験から、結局、健康の維持に一番作用しているのは心であることに気付いています。

標語聖句の前にはこのような言葉があります。「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。」落ち込むこと、失意に陥るのは誰にでもあることですが、そのまま終わらないのが信仰なのです。それは、標語聖句に「多くの人々が豊かに恵みを受け」とあるように、自分ばかりではなく、多くの人々、すなわち隣人が豊かに恵みを受けることを願う心によってられるからです。そして、与えられた恵みによって自己満足したり、間違つて傲慢になってしまつたりするのではなく、「感謝の念に満ちる」からです。感謝とは、心が「これは有り難いことだ」と思っているということですから、幸せな状態にあるとい

うことです。さらに「神に栄光を帰す」とは、その幸せを一人占めするのではなく、「みんなにも分けさせていたどうか」と思える、さらに幸せな状態を表しているのです。

自分も家族も周囲の人も幸せになれるようにと願う心。ここが抜けていると、どんなに礼拝を守つて奉仕していたとしても、それは信仰ではなく、やがて衰えていく身体的活動になってしまいます。

昨年、幸福度世界一と言われたブータン王国で、若者層の薬物事情が悪化しているとの報道があり、さびしい思いがしましたが、何が幸せなことかは数値ではなく、やはり心、「内なる人」に平安があり、そこに主からの恵み、力が注がれることだと思わされました。

たとえ持てるものが少なかったとしても、また何もできなかったとしても、心から「人々が豊かに恵みを受けることができますように、神様に栄光を帰します」と祈るならば、主は私たちを祝福してください。必要な知恵も力も与えてくださると信じるならば、「内なる人」が日々新たにされ、人々が永遠の命の救いに至る福音を宣べ、伝えていくことができるようにしてください。

至極当然の教えですが、今年には「第二次福音宣教五ヶ年計画」を掲げるための備えの年でありますので、これぞ信仰の力、信仰の原点を大切に歩んで参りたいと願います。ハレルヤ！